



市政だより

# 太宰府

NO. 374

S62

2.15

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財

①

### 太宰府天満宮本殿

(重要文化財)

大鼓橋を渡り、楼門をくぐると朱と緑の色が鮮やかな本殿が目にとび込んできます。

延喜三年(九〇三)、五十九年の生涯を閉じた道真公を葬り、その上に祠廟を建てて、靈を祀ったのが本殿の場所といわれています。

現在の本殿は、天正六年秋月の兵によって焼かれた後、天正十九年(一五九一)筑前国守小早川隆景によって再建されたものです。

建物の形は正面五間の流造で、私たちが日ごろ参拝する所は向拝と呼ばれ、唐破風と呼ばれる堂々とした屋根が付いています。また唐破風は本殿左右の車寄の部分にもついています。椽皮葺と呼ばれるヒノキの皮で葺いた屋根は五十年に一度の大祭の折、新しく葺きかえられます。

内部は黒漆塗で、金彩の円柱を建て、欄間は白蓮に鯉と人物、牡丹に唐獅子、鳳凰を彫刻するなど華麗で豪放な桃山時代の特徴をよく表わしています。



市政だより

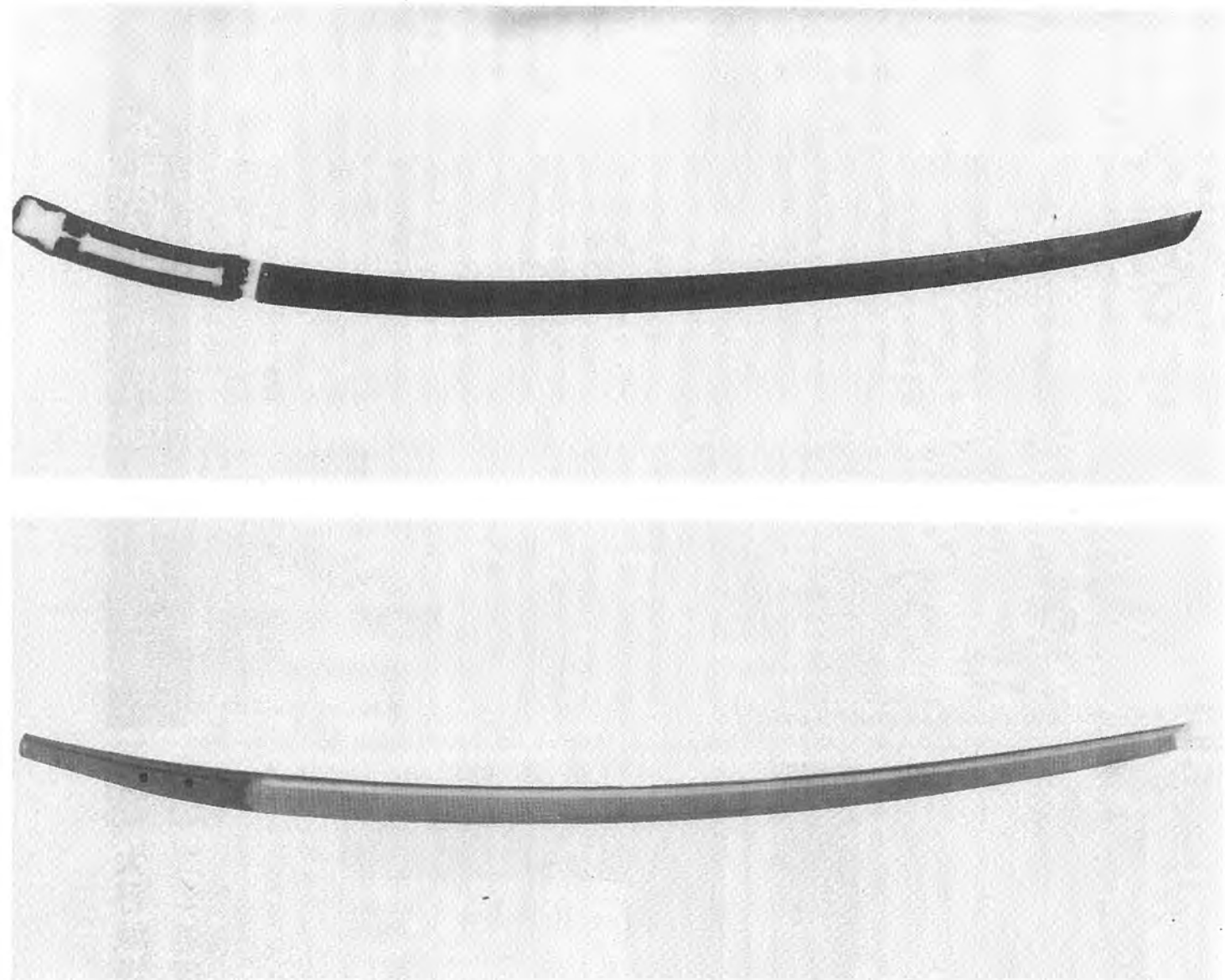
# 太宰府

NO. 376

S62

3.15

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



毛抜形太刀(上)と俊次銘太刀(下)

## 太宰府の文化財 ②

毛抜形太刀 (重要文化財)

総長八十三・四センチ 平安中期

道真公のものと伝えられる太刀で、柄に毛抜形の透かしがあるの  
でこう呼ばれています。武器とし  
ても使えますが、むしろ儀仗用太  
刀としての性格が強いようです。

この種の太刀で現存するものは  
極めて少なく、天満宮のこの太刀  
は、天正の戦乱の時に焼けて、刀  
身と柄部が離れています。毛抜  
形太刀の遺品の一つとして貴重な  
ものです。

俊次銘太刀 (重要文化財)

総長七十七・九センチ 鎌倉初期

藤原時代の優雅な姿をのこすこ  
の太刀は、安楽寺天満宮と呼ばれ  
ていた時代、別当職が儀式の際使  
っていました。柄の部分に俊次  
の銘があり、鎌倉初期、備中国の  
刀工青江俊次が造ったものです。  
古青江派の刀も現存するものが少  
ないので貴重です。

どちらも太宰府天満宮所蔵です。



市政だより

# 太宰府

NO. 377

S62

4.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



山頂に点在する礎石群の一つ増長天礎石群（建物跡）

## 太宰府の文化財

⑳

### 大野城跡

(国指定特別史跡)

面積 百七十九・八六<sup>ケル</sup>

土塁総延長 七千七百八十六<sup>ケル</sup>

石垣 五カ所 城門 四カ所

市の北になだらかに広がる四王寺山には、千三百年前に築かれた日本最古の朝鮮式山城、大野城跡があります。

水城が造られた翌年の六六五年に築かれたこの城も、朝鮮半島の新羅<sup>しらき</sup>に備えてのものでした。

その形は山の尾根に沿って延々と土塁を巡らし、谷は石垣で塞いで中に盆地や谷を取り込んだ広大なものです。

城の出入口には門を築き、城内に建物を建てていました。現在までに八カ所、約七十棟分の礎石が見つかっていますが、その多くは倉庫だったと考えられています。米や武器を収納していたのでしょうか。そして万一、敵が水城を破って攻め込んで来た時には、ここに立てこもって防戦しようとしたのでしょう。しかし幸いにも実戦に使われることなく、後には四天王(四王寺山の名の起り)が祀られ、仏教の山として盛えることになりました。





市政だより

# 太宰府

NO. 379

S62

5.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

## 太宰府の文化財

②④

木造観世音寺菩薩坐像〈重要文化財〉

像高三二一センチ

平安時代後期 観世音寺蔵

ふくよかで、どっしりと坐すこの仏は、講堂の本尊でした。さまざまな姿に変化して現われる観音

様の中で、その根本になるのがこの聖観音です。治暦二年（一〇六六）ころに再興されたと伝えられ、大仏師定朝の様式をよく踏襲しています。体内には造立時の結縁者と思われる多くの名前が見えます。





市政だより

# 太宰府

NO. 381

S62

6.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

## 太宰府の文化財

(25)

### 筑前国筑紫郡

### 宝満山経塚出土品

(重要文化財)

銅経筒 総高二十六・五センチ

金銅菩薩立像

総高二十二・五センチ

九州歴史資料館展示



経塚とは、法華経などの経典を容器に納めて土中に埋納したものです。平安時代の終わりごろ、釈迦入滅後五十六億七千万年のち弥勒如来が下生する時、それを取り出して説法を聞くために経典を残そうとして、このような事が行われました。太宰府周辺は、日本でも有数の経塚が多い所です。この経筒と菩薩像は、宝満山か

ら出土したと伝えられるものです。経筒の中には、経巻が一巻残っていました。固くかたまっていた開くことはできませんが、木製の経軸も残っており、原形を偲ぶことができず。経筒は、十二世紀初めごろ作られたと推定されています。菩薩像は、様式から白鳳時代ごろの作と考えられ、経塚に一緒に埋納された珍しい例です。

写真提供：九州歴史資料館



市政だより

# 太宰府

NO. 383

S62

7.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



石製経筒



銅製経筒

石製経筒 (県指定文化財)  
 高さ三十八・四センチ 平安時代末期  
 太宰府天満宮蔵  
 滑石製の経筒で、佐賀県の大和町で出土したものが、天満宮に奉納されたものです。  
 このほかに、前月号掲載の銅経筒によく似た経筒(県指定)が天満宮に所蔵されています。これは筒身の銘文から、長治三年(一一〇六)四月二十日に僧慶源が願主となり、経塚を造ったことがわかります。

銅製経筒 経巻  
 陶製外容器  
 (市指定文化財)  
 高さ二十九・七センチ 平安時代末期  
 太宰府市蔵  
 四王寺山麓の原八坊跡の一角で昭和五十七年五月、土木工事中に発見されました。経筒には経典一巻が納めてあり、経筒全体を陶製の容器がすっぽり覆っていました。左の石製経筒などに比べるとスマートな形をしています。

太宰府の  
 文化財  
 26





市政だより

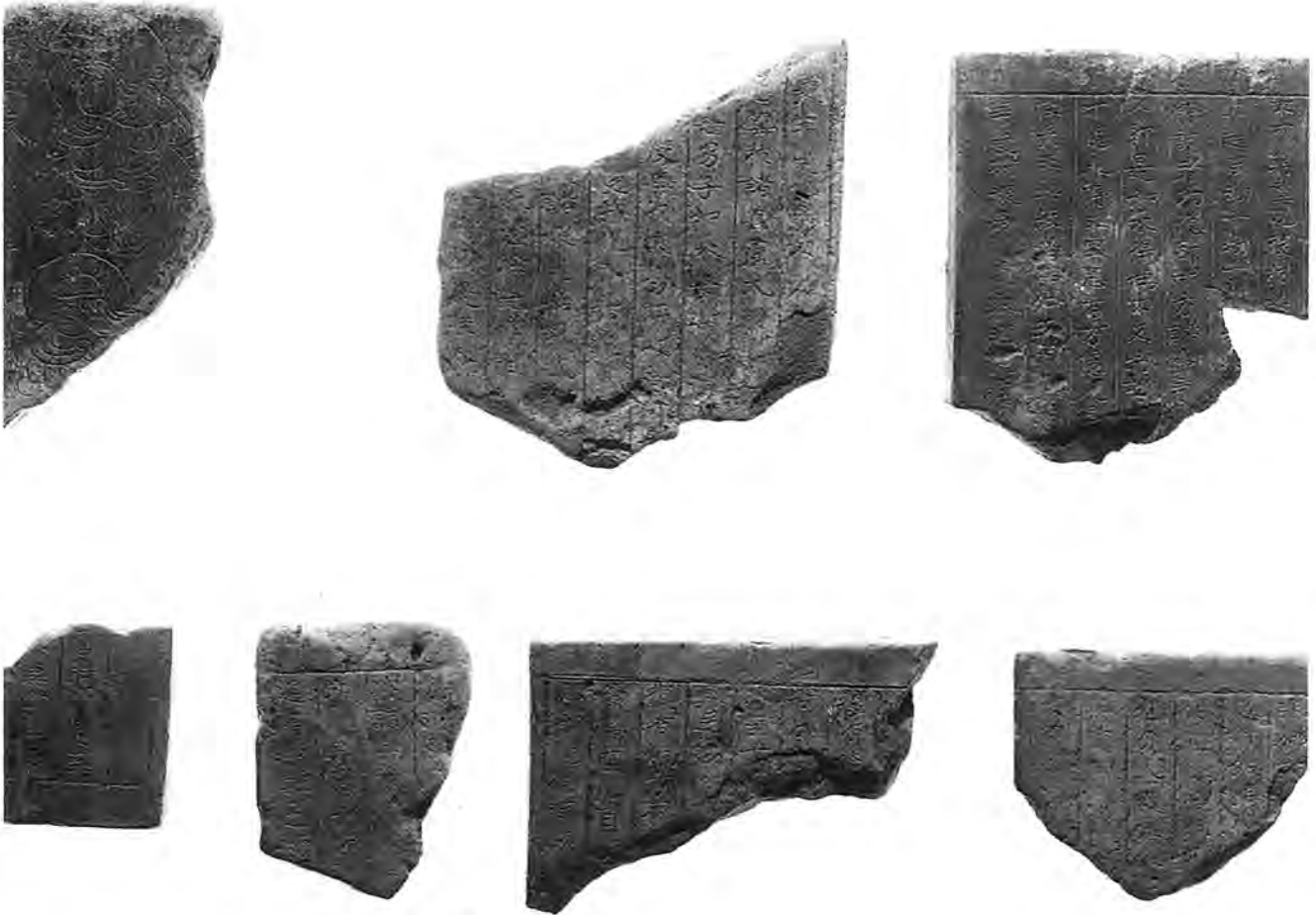
# 太宰府

NO. 385

S62

8.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財 ⑳

### 瓦経七個

(県指定文化財)

縦約二十三センチ 横十九センチ

厚さ約一・五センチ 平安時代末期

太宰府天満宮蔵

瓦経とは、前二回にわたって紹介した経塚遺物の一種で、お経を紙に書く代わりに粘土板に刻んで焼きしめたものです。

これらは福岡市西区の飯盛山頂から出土したものの一部で、石囲いの穴に立て並べられていたようです。お経以外に、仏を描いたものもあり、県立糸島高校所有の一枚から、永久二年(一一一四)に作られたことがわかります。

以上、経塚について、あらましを述べてきましたが、おわかりいただけましたでしょうか。残念ながら、今だに昔の人の信仰を壊す経塚の盗掘が絶ちません。古の人々の願いを砕き、人類の遺産の破壊につながる盗掘はやめてほしいと願っています。



市政だより

# 太宰府

NO. 387

S62

9.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の 文化財

(28)

### 竹の曲

(県指定無形民俗文化財)

筑紫路に秋の訪れを告げる天満宮の神幸式は、現在では九月二十二日から二十三日に行われていきます。束帯や狩衣姿の神官・氏子が神輿を守って進む行列は、王朝絵巻を見るようですが、竹の曲はこの祭の中で奏せられます。

天満宮に属した商家六座（米屋座、鋳物座、鍛冶屋座、染物座、細物座、相物座）の子孫が代々伝える芸能で、道中の道楽、そして還御後に浮殿と本殿前庭で稚児のささら舞と扇舞が奉納されます。

舞は中世の田楽に能楽等が混り合って現在の形になったと思われ、中世の芸能を考えるうえで貴重なものです。

締太鼓・笛（以前は笙も）謡の大人七人と、ささらと舞方の稚児一人が奉納する竹の曲は、暮なすむ秋の夕べ、私たちを中世の昔に誘います。





市政だより

# 太宰府

NO. 389

S62 10.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

## 太宰府の文化財

29

### 木造大黒天立像 (重要文化財)

クス的一本造 像高百七十二センチ  
平安時代後期 観世音寺蔵

大黒様というと、俵に乗って大きな袋と打ち出の小槌を持ったふくよかな姿を想い出すが、この大黒天は、眉をひそめ、少し怒ったような表情で、体つきもスマートで

ある。

大黒天は中国などでは寺の守護糧食を司る神として寺の食堂などに祀られた。それが日本に入った後、民間信仰と結びついて七福神の一人になるのであるが、この像は、それ以前の中国渡来の古い形を残す像として貴重である。





市政だより

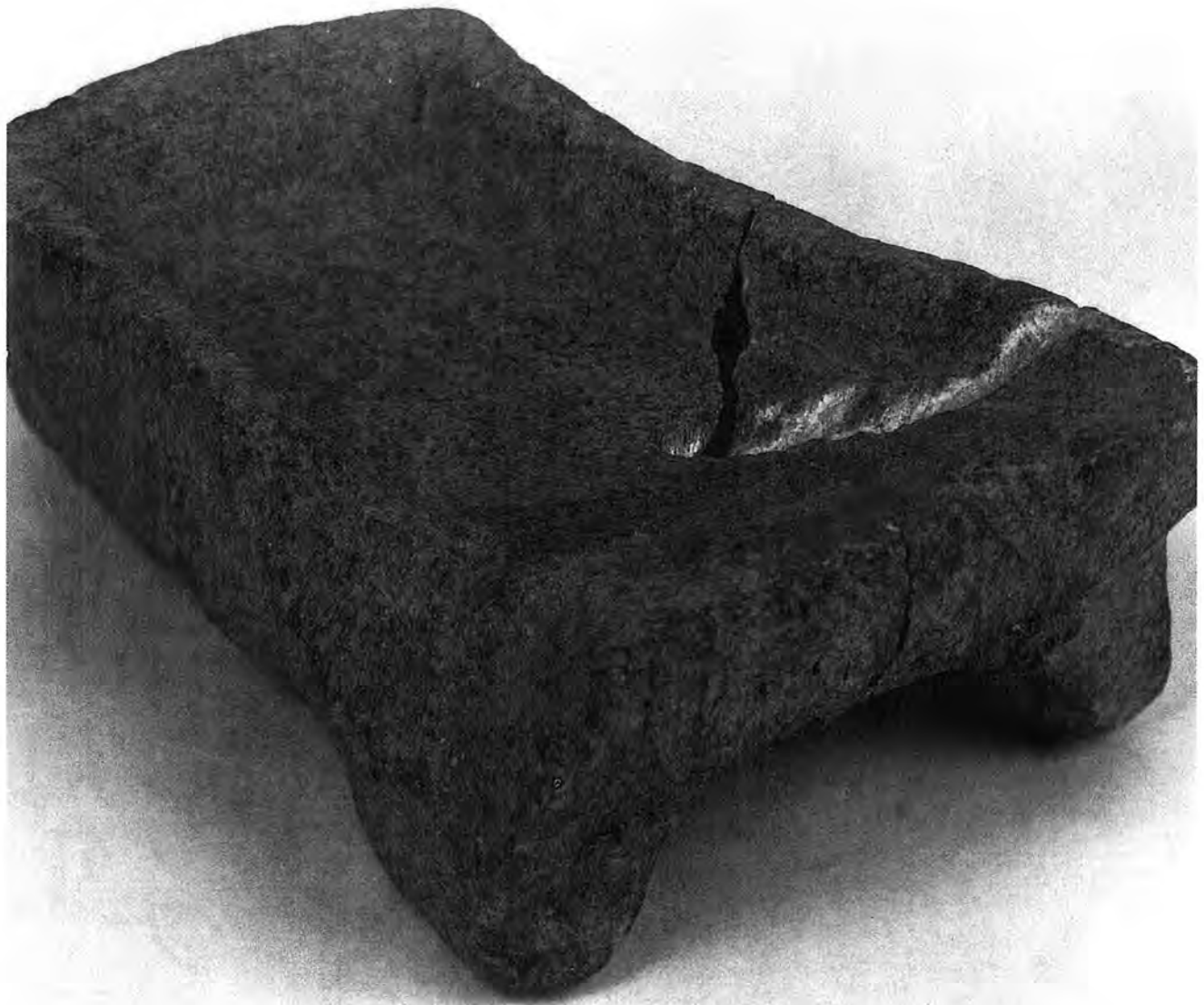
# 太宰府

NO. 391

S62

11.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財

30

滑石硯かつせきすずり  
(県指定文化財)

長さ十五・八センチ 硯頭幅約十センチ  
太宰府天満宮蔵

この硯は、漢字の「風」という字に形が似ているので風字硯と呼ばれる硯の一つです。私たちが日ごろ目にする黒くて堅い硯と違い、これは灰青色の滑石で作られています。

滑石というのは、子供のころ、「オンジャク」とか「ろう石」とか言って、地面の上に絵や字を書いて遊んだ、あの石のことです。北部九州では、平安時代後半ごろ、この滑石を使って鍋（石鍋）などを作ることも多かったようですが、このような硯として使われた例は非常に少ないようです。

この硯は、天満宮境内で工事に発見されたもので、いつの時代のものかはつきりわかりませんがこれによく似たものが大宰府跡から出土しており、これは十一世紀後半ごろに考えられています。大宰府勤めのお役人が、一生懸命、墨をすっていたのでしょうか。